

『バイアーノの修道院』の出版をめぐって：アン リ・フルニエのポール・ラクロア宛未刊書簡

高木, 信宏
九州大学大学院人文科学研究院文学部門：准教授：フランス近代文学

<https://doi.org/10.15017/16880>

出版情報：文藝研究. 107, pp.87-114, 2010-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：



『バイアーノの修道院』の出版をめぐる ——アンリ・フルニエのポール・ラクロア宛未刊書簡——

高 木 信 宏

1829年8月22日にパリの出版業者アンリ・フルニエが発売した『バイアーノの修道院——16世紀の年代記——』と題された一書は、スタンダールによる翻訳を含むのか否かという問題ゆえに長らく研究者の関心を惹いてきた。発端となったのは、1911年にアドルフ・ポープが公表したスタンダールの旧蔵書目録である。これは1842年に作家が死去したときパリの宿所に残されていた手沢本のリストであり、作成者は遺言執行人ロマン・コロンの死後、その肉親を通じて書冊を譲り受けたオーギュスト・コルディエである¹⁾。彼は『バイアーノの修道院』について目録のなかでこう注釈をつけている——

スタンダールの翻訳、ポール・ラクロア（愛書家ジャコブ）の序文と解題あり。ラクロアによる導入部分は最初の122頁。スタンダールの年代記は123頁から229頁までを占める。刊行者が付した、231頁から258頁までの注釈は、244頁と253頁、そして258頁にスタンダールを褒めそやす見解を含む。同書にはロマン・コロンのように次のように書かれた覚書が添えられている。「バイアーノの修道院廃絶についての史実。ペールがこの話を写しとらせた小冊子は次の題名をもつ。G... M... によって出版された、キアーラ、あるいは16世紀の秘された奇譚集 [...]」²⁾

かような詳細をコルディエがどのようにして知ったのかは詳らかになっていない。その後、注釈の真偽をめぐるつみ重ねられた諸説を再検証し、スタンダールの翻訳ではないとする仮説を提出したのが、ヴィクトル・デル・リットである³⁾。彼は自らが校訂にあたったビブリオフィル版『イタリア年代記』の

序文においてこの問題をとりあげ、一次資料を綿密かつ慎重に考察しつつ、自説の根拠をきわめて説得的に論証した。とはいえ、もっぱら状況的な論拠にもとづくことが災いしてか、いまだ斯界の定説とはなっていない感がある。

以下で、われわれがフランス国立図書館の許可をえて活字にするのは、アンリ・フルニエがおもに『バイアーノの修道院』の印刷に関する用件で分担執筆者のポール・ラクロアに宛てた一連の未刊書簡である⁴⁾。本稿ではその転写の掲載に先立ち、同書出版の経緯について手紙の内容から明らかになる新事実を示しつつ、デル・リットの説とは異なる観点から問題の解明を試みる。

1

ラクロア宛フルニエ自筆書簡全15通のうち、『バイアーノの修道院』の出版にかかわる情報が認められるのは9通である。その文面の具体的な検討にはいる前に、まず9通の執筆年代について整理しておきたい。というのは、日付が記されている手紙は2通だけしかなく、またそれぞれの右肩には、おそらく保管の便宜をはかって司書が付した番号が振られているものの、各書簡の記述内容から判断するならば、その配列は実際に手紙が書かれた順序とは一致していないからである。

9通のなかで最も古いものは整理番号(6)が振られた手簡であろう。そう推測する手がかりとなるのは、次のくだりである――

ともかく私は印刷をさせていますし、第6シートla feuille 6から始めていますので、例の5枚のシートles 5 feuillesについては間違いなく15日から18日後ということで、あなたのご助力を当てにせざるをえないのです。

ここでの「feuille」という語は原稿用紙のことではなく、印刷された枚葉紙、つまり「シート」を指す。現に『バイアーノの修道院』の版本にあたると、ラクロアのテキスト部分は5つの折丁からなり、そして「*Récit* 史話」と題された、

その後続部分の最初の頁には「6」の折丁番号が打たれており、引用箇所の記事と符合する。そうすると手紙の趣意は、後続する「史話」の印刷が先行しており、その最初のシートに折丁番号「6」をすでに印字し終えているので、なんとしてでも5シート分の原稿を18日後には書き上げて欲しいという、ラクロアへの依頼であることが分かる。

書簡(6)に続くのが、整理番号(7)と(1)がそれぞれ振られた2通の手紙である。「1829年7月23日」の日付が記された後者は、「私に渡せるものが何ものなければ、お仕事をそのまま続けてください」という書き出しで始まり、最後は次のように締めくくられている――

私は5シートを、少なくとも今週中に3シートをいただかねばなりません。

この督促の内容からみて、7月23日付の書簡(1)が(6)のものよりもあとに書かれたことは明白である（前者の結辞が「Tout à vous」であるのに対し、後者の末尾には「Agréez l'assurance de ma considération」という表現が添えられていることも、かかる推測を補強する）。さらに、原稿の締切日に差しかかった頃に(1)の手紙が出されたと考えるならば、書簡(6)のおおよその執筆時期を7月23日から15日ほど遡った7月上旬と推し量ることもできよう。

他方、書簡(7)の執筆時期はこれら2通のあいだに位置する。そう見なす理由は同書簡に、「私は間もなく組版を終えますが、そうなればあとは5枚のシートを携えたあなたをお待ちするばかりです。と申しますのも、最初のが第6シートとなりますので」とあるように、書簡(6)の時点から印刷作業が一段と進行していることが窺い知れるものの、書簡(1)ほどには原稿催促の文面に切迫感がないからである。

さて、7月23日付の書簡(1)以降の手紙に目を移すならば、それらは整理番号(3)―(8)―(5)―(2)―(4)の順で続く と推定できる。5通はいずれもラクロア担当部分の校正刷の受け渡しを話題にしているので、先に挙げた3通よりもあとに書かれたことは間違いない。これら5通の順序を見定めるうえで手がかりとなる

のは、印刷工程に関する言及である。書簡(3)と(8)がラクロアへの1シート目の校正刷の送付を告げ、また原稿の続きを要求しているのに対し、(5)と(2)の手紙は3シート目の校正刷を話題にしている。そして書簡(4)の記述は5枚のシートの組版が終わったこと、本の刊行が近づいたことを窺わせる。

さらに細かく見ていくと、書簡(3)ではフルニエがラクロアに序文を送ると知らせているのに対して、(8)のほうではその序文を返すように求めている点から、(3)の手紙が(8)に先行することは疑えまい。つぎに、書簡(5)のなかでフルニエは3番目のシートを手元にとっておくように伝えているのに対して、手紙(2)では手紙の配達夫が3番目のシートを受けとって帰る旨を告げているので、2通の前後関係もまた難なく察せられる。

以上をまとめるならば、8通の書簡は1829年7月初旬から『バイアーノの修道院』が刊行された8月22日までに、(6)－(7)－(1)－(3)－(8)－(5)－(2)－(4)の順で書かれたと見なすことができよう。9通のうち残る1通、すなわち書簡(9)には1830年2月22日の日付が記されており、同書刊行の半年後のものである。では、各書簡の執筆時期を念頭におきつつ、次にそれらの内容の検討に移りたい。

2

まず9通の信書を通読して分かるのは、発行人のアンリ・フルニエが『バイアーノの修道院』の企画から編纂、宣伝までのすべてをとり仕切っていることである。それだけではない。6つのパート（「序文 *Avant-propos*」, ラクロア執筆の「16世紀の修道院についての考察 *De recherches sur les couvents*」, 「*Récit* 史話」という題名をつけられた歴史的説明, 「年代記 *Chronique*」と題された、イタリア語文献の仏語翻訳、巻末の「人名 *Noms*」と「註 *Notes*」）からなる本書の構成はもとより、「序文」「史話」「注解」のテキスト作成にもフルニエは少なからず関与したはずである。そのように推測する理由を以下に順を追って確認していこう。

まず出版にいたった経緯については、書簡(6)にこう仄めかされている――

イタリア年代記を配達夫に渡していただけないでしょうか。それを私に譲ってくれた人物が、この題材に関して印刷された小冊子を一部、とり寄せるように私に言ってくれ、私はそれに応じたのです。これを私のもつ情報と併せて考えた結果、この年代記が本物であると見なすにいたしました。

フルニエは「年代記」の刊行を誰かから依頼されて、それを請け負ったのではなさそう。彼はある人物から年代記を譲り受けたのであり、関連文献を収集して物語の信憑性を自ら確かめたうえで出版に踏み切ったのである。ここで言及されている2種の文献のうち「イタリア年代記 la chronique italienne」と呼ばれるものは、刊本のなかで「Chronique」と題される仏訳テキストそれ自体ではなく、その底本となったイタリア語の写本を指すと思われる。なぜなら続く書簡(7)には、「私はなおこの写本 ce manuscrit が本物であると信じている」と記されているばかりでなく、「序文」でもイタリア語原典をいずれ出版すると予告しているからだ⁵⁾。他方「小冊子 brochure」のほうは、1820年にナポリでカラブリアの医師が出版した印刷物のことであろう。「序文」の説明によれば、翌年のオーストリアによるナポリ侵攻の際に官憲に押収されてしまい、当時にあつてすでに現物がほとんど残っていない稀覯書だという⁶⁾。すると、そのような小冊子までも取り寄せることができたのだから、写本の譲渡者はナポリの事情に精通し、かつ現地の人間とのあいだに深い交流がある人物と推し量られるが、そのさらなる考察はひとまず後段にゆずりたい。

写本の真正さに確信をもったフルニエは、その出版にお墨付きをあたえようと欲して、1807年生まれの若き俊秀にして「愛書家 P.-L. ジャコブ」の筆名で博識の名声をえていたラクロアに白羽の矢を立てたのであろう。もっとも、16世紀の修道院をテーマにした論考を書くように依頼されたラクロアは、出版のイニシアチブをとった様子はなく、一連の手紙を読む限り、彼の役割はあくまでも消極的な協力者の域を出ない。率先して段取りをつけているのはやはりフルニエのほうで、『バイアーノの修道院』の刊行に人びとの耳目を集める算段についても、たとえば書簡(6)のなかで「この出版を前もって賞賛させる方法に

ついて話をしましょう」とラクロアに提案し、続く(7)の手紙では「ヴォールル」紙と「フィガロ」紙の名前をあげつつ、宣伝記事の準備を進めている。

本の編纂についてもフルニエは裁量権をいかに発揮している。書簡(6)には「歴史的な論考は私が史話と名付ける部分にはいることになり、註はその他の資料を含みます」とある。彼の手元には、写本とその仏訳、小冊子のほかにも多数の関連資料があったようで、書簡(7)ではその振り分けについてさらに具体的にラクロアに説明している――

私のほうの仕事は目下ここまで進んでいます。シート1,2,3,4が出来ましたが、まだ刷り出されてはいません。それらは、お目にかけたお役所書類のなかから選んだ文書で増量した史話と、どうにも欠かせない注釈のせいで長くなってしまった年代記の冒頭とを含みます。

さらに(8)の手紙でフルニエは、「史話」の増量部分を具体的に示す一文を残している――

5日に「ヴォールル」紙に掲載されるのをご希望でしたら、81頁から――史話、94頁、3行目までを、続けて――121頁、3番目の改行「一世紀後」からお終いまでを、私にお渡し願います。

これが、私たちの本を水増しするために足した余談を除く、本来の「史話」となります。

『バイアーノの修道院』は八折判なので1シートは16頁。ラクロア担当部分は刊本の80頁目で終わっており、ちょうど5シート分である。この引用部分にある「81頁」とはまさしく「史話」の最初のページにほかならない。ここでフルニエはその94頁から121頁までが、増量部分された「余談 digression」だと言っているのである。

こういった一連の詳細な記述から判断するならば、フルニエの役割は単に第

3者の原稿を印刷しただけとは見なせまい。むしろ多数の資料を手元に所有していた彼が、「史話」や「注解」の原稿作成にも何らかの形で関与したことが推測されよう。一方のラクロアはどうかといえば、フルニエのどの手紙にもそうした事実は確認できないし、そもそも説明を受ける立場の彼が「史話」や「注解」の原稿を執筆したはずがない。それゆえ「史話」までもラクロアの筆に帰すオーギュスト・コルディエの注解は、まったく根拠を欠く憶測であることが判明するのである。

「序文」についてはどうだろうか。そこには、1820年に「この年代記を解説するのに必要な資料が揃っていたので、元の言語でそれを世に問うつもりだった」が、例の小冊子が出版されたのでとり止めたとある⁷⁾。すると「序文」の執筆には、1820年にナポリにいた人物、おそらくは写本の譲渡者が関与していると推測できよう。だが奇妙なことに、フルニエは書簡(7)の末尾で、「序文と題名をお渡ししますが、いずれ拝眉の折りに返していただきます。もしそうするのが適当だとご判断になられたら、それを修正して、内容を増やしてください」などと、まるで自分で書いた原稿のごとく頼んでいる。さらに7月下旬に書かれたとおぼしき書簡(3)でも、同様の依頼が繰り返されている――

序文をお送りしますので、ご面倒でなければ、それを手直しして、もういちど点検なさってください。そしてあなたについて数行ほど書き足していただければ幸いです。

このようにフルニエが「序文」を修正する裁量をラクロアに委ねている事実を踏まえるならば、前者もまた執筆に加わった蓋然性を低く見積もることはできない。「序文」のテキストは翻訳された物語が史実であることを強調してやまないが、そもそもそうした真正さに賭けて出版を決定したのはほかならぬフルニエだったのであり、「序文」の文面には彼の意向が強く反映されているように思える。刊行から半年たった手紙でもフルニエはラクロアに次のように頼んでいる――

この本はまだ時おり売れているので、その月並みを話題にしても仕方ありません。むしろ世間が信じている本書の真正さについて話されるほうがよいのです。

しかもフルニエがそれなりに能筆の人物であったことも忘れてはならない。1825年の刊行後、何度も版を重ねた『活版印刷概論』は彼の労作である。この短い「序文」ぐらいいは造作なく書けたはずだ。そうすると「序文」のテキストは写本の譲渡者とフルニエ、そしてラクロアの3者による合作と見なしておくのが妥当であろう。この点においてもまた、スタンダールの蔵書目録のなかで「序文」をラクロアの筆に帰したコルディエが、臆断を重ねていたことが判明する。もはや彼の注釈のうちコロン覚書の転写部分を除けば、その信憑性はきわめて薄いといっても過言ではない。

ところで書簡(3)にはもう一点、きわめて興味深い情報がある。『バイアーノの修道院』の表紙と扉にはイタリア語写本をフランス語に逐語訳した人物の名前が「M. J.... C....o」と略記されているが、そのイニシャルがじつはフルニエとラクロアによる全くの捏造であったことを示すくだりである――

書名についていえば、カラファ家か、あるいは別の名門に属する大勢のうちの誰かと見なされるようなイニシャルをつけることにしましょう。

注目すべきことに、このように「年代記」の翻訳者の名前を秘匿する理由について、フルニエは1829年7月23日付の書簡(1)のなかでこう打ち明けているのだ――

疑いなく私の知るところでは、翻訳者はナポリの上流一族に連なる男性です。絶対に自分の名前を出せないのです、べつのイタリア人の名を載せるのです。

さらに翌年2月22日付の書簡(9)の中にも、翻訳者の素性にかかわる重要な記述がある――

私はこの本をほとんど重要視しておりませんし、あなたをうんざりさせないようにするためにも、あなたがその作者ではないことを、ご自身の『二人の狂人』と「ジュルナル・ド・ラ・リブレリー」紙のなかで表明されるようにお勧めします。ですが、この哀れな年代記に手ひどく襲いかかるのはご勘弁願います。よろしければ年代記は、バリーに数週間滞在したナポリの貴族によって出版社に託されたのだと仰ってください。

これらの証言を総合すると「年代記」の翻訳者は、すでにとりあげた写本の譲渡者と同一の人物と見なせるが、するとナポリの貴族とされるこの第3の人物とはいったい誰なのか。フルニエの一連の信書によってコルディエの憶測は完全に斥けられ、デル・リットの厳密な考証は新たな実証的裏付けをえた以上、もはやスタンダールではありえまい。この翻訳者の正体については視角をかわえて考察を続けよう。

3

周知のように『バイアーノの修道院』と出版の時期をほぼ同じくする『ローマ散歩』（全2巻、1829年9月5日刊）には、バイアーノの修道院を舞台にした事件についての言及が3箇所があり、そのうちのひとつ、1828年10月1日付の手記にはこう書かれている――

僕たちはバイアーノの修道院の廃絶を語っている手稿を閲覧した。胸を引き裂くような興味といえば、死刑執行と、あのたいそう美しい2人の修道女が、ナポリの大司教派遣の司祭が差し出す毒ニンジン液の入った大きなコップを取るように迫られる場面を超えるものはない。これらの若い娘たちのわななく動作や、短剣で自ら死ぬことの方を選んだ友人たちに接吻するときに彼女らの口から洩れる言葉は、いかなる悲劇のなかにも匹敵するものはない。司祭の一人は、これらのたいそう美しい女性たちの最後の行動の場面にこらえきれずに、隣室に引き下が

らずにはいられなかった。⁸⁾

スタンダールが「手稿 *manuscrit*」を閲覧したというのは虚構であろうとデル・リットは見なしていたが、「手稿」の存在に触れるフルニエの書簡を想起するならば、作家の証言は——閲覧の時と場所は別にして——に確かに現実味を帯びてこよう。またデル・リットが指摘するように、同書第2巻冒頭に配置されたルクレツィア・フランジマーニの挿話は、『バイアーノの修道院』が伝える物語の翻案のごとき印象をあたえる⁹⁾。事実がその通りだとしたら、先の引用部分も含め、スタンダールがいつ、どのようにして事件の詳細を『ローマ散歩』のなかに採り入れたのかという問題は検討の余地がありそうだ。

スタンダールは1829年8月20日、正誤表の作成のために『ローマ散歩』第1巻を送るよう、刊行者ドロネーに依頼していることから¹⁰⁾、『バイアーノの修道院』発売の時期、紀行の印刷工程は最終段階に差しかかっていたと推し量れる。そうだとすれば、年代記の発売後にその内容を知った作家が自著の折丁を遡って、第2巻冒頭のフランジマーニの挿話や先に挙げた引用部分を書き加えたと見なすのは、加筆の分量や当時の印刷工法などを考えるとかなり無理であろう。スタンダールが『バイアーノの修道院』の公刊以前にその内容に通じていたのは確実である。作家がアンリ・シメオンに書き送った同年7月23日付の書簡から判断するならば¹¹⁾、『ローマ散歩』の組版作業はその2日後の7月25日には1829年3月4日付の旅日記の部分、つまり第2巻の終わり近くまで進んでいたと推定できる（八折判で全37の折丁のうち問題箇所は35番目のものに含まれ、しかもシメオンの名が登場するのは差し替え刷である）。そうすると、フランジマーニの物語が含まれる最初の折丁が組み付けられた時期は、とうぜん7月25日からさらに遡る5月下旬あたりであろうか¹²⁾。このような見積もりに立つならば、スタンダールは遅くとも同年の5月中には詳細な情報をえていたはずである。

ところで、情報の入手時期を1829年の6月以前と見積もるならば、情報源についても絞り込みが可能となる。フルニエがラクロアに宛てた一連の手紙から

判断する限り、彼らふたりが「ヴォール」 「グローブ」 「フィガロ」 など新聞数紙を相手にして、『バイアーノの修道院』の前宣伝に本腰を入れたのは7月下旬であろう。そうだとすれば、関係したジャーナリストを介してスタンダールが情報を仕入れたのではないかという仮定は、情報の入手時期と齟齬をきたす。現在の一次資料の許す範囲内で浮かびあがる情報源は、そうするとフルニエかラクロア、あるいは第3の人物ということになる。

まずポール・ラクロアについては、当時スタンダールとどのような関係であったのかが確認できない。管見するところ、1830年11月2日付のフレデリック・メルセー宛書簡のなかでスタンダールがその名を挙げているのが唯一の痕跡となりうるが、しかし姓のみの言及なので当人のことなのか確証できない。ラクロア側の資料にも2者の交誼を裏づける資料が見当たらず、また彼がフルニエから執筆の依頼を受けた時期は1829年の7月初旬ないしは6月下旬と推測されることから考えても、ラクロアがスタンダールの情報源であったとは考えにくい。

では、フルニエのほうはどうか。1829年当時、ふたりは旧知の間柄であった。1825年にスタンダールが『ラシーヌとシェイクスピアⅡ』をデュボン・ロレ書店、『工業家に対する新しい陰謀について』をソートレ書店からそれぞれ上梓した際、印刷を実際に担当したのはフルニエだった。ニコル・フェルケによれば作家と出版業者との間をとりもったのは、美術評論家ドレクリューズ主宰の夜会でスタンダールとよく同席することのあった、書店主フィリベール・オーギュスト・ソートレであったらしい¹³⁾。1825年に出版業を営み始めたソートレが、仕事がらみで夜会の常連の相談にのると、前年に開業していたフルニエを印刷業者として紹介していたようで、先に挙げたスタンダールのふたつのパンフレもそうした例に数えられる。

だが1826年以後は、スタンダールとフルニエの関係は明らかではない。後者にかかわる作家側の資料は、『アルマンス』の出版に関する1827年4月12日付の後者宛書簡と、1835年12月24日付の遺言書だけである¹⁴⁾。遺言には『アンリ・ブリュラールの生涯』の草稿の遺贈候補者、つまり自伝の死後出版の引き

受け手として、ルヴァヴァスール、ポーラン、ドローネーなど知己の書店主と並んでフルニエの名が記されている。一方、フルニエ側の資料でもスタンダールとの交際を詳らかにする文書は見当たらず、1826年以降に前者が後者の出版を請け負った形跡は皆無である。フルニエの台帳に作家の名が現れるのは唯一1825年度の記録のなかだけであり¹⁵⁾、この事実もまたスタンダールが『バイアーノの修道院』の出版に直接にはかかわっていないことを裏づけよう。したがって、かりにフルニエが情報の提供者であるとするならば、謎のナポリ貴族によって持ち込まれた写本類を作家に見せて、真贋の鑑定を依頼したというケースを想定するのが妥当であろう。

ところで、このナポリの貴族とされる謎の翻訳者が、作家の情報源であるとすればどうだろうか。スタンダールにはナポリ出身の友人・知人が複数いるが、なかでも該当しそうなのは、ナポリの亡命者ドメニコ・フィオリとアレクサンドル・ミシュルー（アレッサンドロ・ミケルー）であろう。前者は1799年のパルテノペア共和国崩壊後に政治犯としてフランスへ亡命、一説では1820年のナポリ革命にも加担したとされる。もとは弁護士だったが、モレ伯の庇護をえてフランスの官界にはいった人物である。1821年頃、友人アドルフ・ド・マレストの紹介でスタンダールはフィオリを知るが、彼に寄せる篤い信頼は終生変わることなく、自作の批評を求めるだけでなく、『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』の1826年版刊行の折りには1799年の事変について情報の提供を受けたようだ¹⁶⁾。ところで、『バイアーノの修道院』の序文には関連史料の入手経路がいくつか示されているが、ナポリで公証人をしていた父親から「バイアーノの修道女たちにかかわる親族の膨大な文書を譲り受けた弁護士」からも情報をえたというくだりは¹⁷⁾、フィオリのかつての職業を想起させるだけに興味深い。

フィオリが貴族ではないのに対して、ミシュルーのほうは従男爵であり、ナポリの貴族という条件に合致する。彼は1820年に駐在ベルリン代理公使の肩書きでプロイセンへ赴くものの任務を遂行する前に炭焼^{カルボナーロ}党員の嫌疑をうけ、翌年逗留先のドレスデンからパリへ亡命し¹⁸⁾、イタリア座のオペラ歌手バスタ夫人が住んでいた、リシュリユー街のオテル・ド・リロワに居を定めた。1822

年の夏にスタンダールが同じホテルの隣部屋に越してきて始まる彼らの交際については『エゴチスムの回想』第7章に詳しい¹⁹⁾。当時ピアノの伴奏や音楽教師で糊口を凌ぐミシュルであったが、そうした音楽の素養をスタンダールは買っており、『ロッシーニ伝』の内容には彼との会話に負うところもあると第27章の傍注に記している²⁰⁾。さらにフランコ・カーザマッシマの考証によると、1826年版の『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』の刊行の際にも作家はミシュル一家の未刊行資料の恩恵に浴したという²¹⁾。

ミシュルがナポリを離れたのは1820年10月以降なので、バイアーノの修道院に関する小冊子がそれ以前の出版であれば、フィオリとは異なりこれを現地で目にしたことも考えられよう。しかもシチリア両王国の全権公使など政府の要職を務めた父アントーニオをもつだけに、政治犯の烙印を押される前は国の古文書館への出入りも自由であったはずだ。

またフルニエの1829年7月23日付手簡には、ナポリ貴族の翻訳者は理由^{わけ}あって匿名での出版にしか応じられない旨が記されているが、この点もミシュルの境遇に当てはまろう。1825年のフランチェスコ1世即位の際に恩赦を受けたとはいえ、その後も彼は内務省の監視対象であったことが、フランソワ・ミシュルの調査で判明している²²⁾。小冊子がナポリ革命後、すぐに発禁処分を受けたことを思えば、同じ題材を扱う書物に名を連ねて当局をいたずらに刺激するような軽率は、ミシュルの立場ならば是が非でも避けたであろう。

ミシュルあるいはフィオリ、ふたりのうちどちらかが『バイアーノの修道院』の翻訳者であったとしたら、その公刊前にスタンダールが内容を知りうることは十分に考えられる。たとえば、作家にイタリア語の写本や史料を見せたうえで、出版を請け負ってくれそうな業者の紹介を頼むこともありえよう。スタンダールのほうは旧知のフルニエを推薦するだけでなく、『ローマ散歩』のなかで密かにその宣伝を買ってでたのかも知れない。さらに想像をたくましくすれば、作家が翻訳の手助けをする一幕すら思い浮かぶ。もちろんこれは、あくまで仮定の話である。

結 語

以上の考察によってスタンダールの情報源はふたつの可能性に絞られよう。すなわち『バイアーノの修道院』の翻訳者が作家と面識のないナポリの貴族だとすればアンリ・フルニエが、そうでなければアレクサンドル・ミシュレー、ないしはドメニコ・フィオリが情報の提供者だったと考えられる。一次資料の現状からはどちらのケースとも決めかねるところだが、あえて速断の愚を犯すならば、フルニエだとする仮説を採りたい。その根拠をなすのは、修道院廃絶に関するイタリア語手稿と『バイアーノの修道院』刊本のそれぞれを作家が入手した時期である。

フランス国立図書館が所蔵するイタリア語の手稿は、1839年頃にスタンダールが筆写させたものであり、それも1820年にナポリで刊行された小冊子の写しであることがデル・リットの検証によって判明している²³⁾。これは『バイアーノの修道院』の翻訳にもちいられた底本とは異なるテキストだという。刊本については作家が他界した1842年3月23日にパリの宿所オテル・ド・ナントに残されていた一冊が確認されるのみ。その購入の時期は『尼僧スコラスティカ』の草稿に残された、「文体を真似るために、製本済み『バイアーノの修道院』を向かいで買うこと」という備忘の日付から1842年3月15日以降であることは疑えない²⁴⁾。1829年にミシュレーかフィオリに写本等を見せてもらったのだとしたら、こうした類の奇談に目のないスタンダールのこと、躊躇うことなく自家用に写しをとらせてもらったのではあるまいか。しかもいずれが相手であれ、献本を受けてしかるべき間柄であったにもかかわらず、けっしてそうはなっていない。これに対してフルニエのほうは、一連のラクロア宛書簡に窺い知れるように資料の扱いには慎重である。状況からの推測だが、これが目下のところ、われわれがスタンダールの情報源をフルニエと見なす所以である。

註

- 1) Voir Victor DEL LITTO, « Les autographes stendhaliens d'Auguste Cordier. Documents inédits », *Stendhal Club*, 15 juillet 1973, n° 60, pp. 277-278.
- 2) Adolphe PAUPE, « La bibliothèque de Stendhal. Documents inédits », *L'Amateur d'autographes*, août-septembre 1911, pp. 286-294 (Reproduit dans *La vie littéraire de Stendhal*, Paris : Libr. Ancienne Honoré Champion, 1914, pp. 77-100).
- 3) Voir Victor DEL LITTO, « Préface » pour *Chroniques italiennes*. Texte établi, annoté et préfacé par V. DEL LITTO, in *Œuvres complètes* de Stendhal. Nouvelle édition établie sous la direction de V. DEL LITTO et Ernest ABRAVANEL, Genève : Cercle du Bibliophile, 50 vol., 1967-74, t. 18, pp. XII-XVIII.
- 4) Bibliothèque nationale de France, Ars.-MS-9668.
- 5) Voir anon., *Le Couvent de Baïano, chronique du seizième siècle*, extraite des archives de Naples, et traduite littéralement de l'italien par M. J.... C....o ; *De recherches sur les couvents au seizième siècle*, par M. P. -L. JACOB, bibliophile, Paris : Libr. H. Fournier jeune, 1829, p. XI.
- 6) *Ibid.*, pp. IX-X.
- 7) *Ibid.*, p. IX.
- 8) STENDHAL, *Promenades dans Rome*. Texte établi et annoté par Armand CARACCIO. Préface de Henri de RÉGNIER, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. 7, p. 352. 邦訳には白田紘訳『ローマ散歩』（新評論，2000年，第2巻，161頁）を使用した。
- 9) Voir DEL LITTO, « Préface » pour *Chroniques italiennes*, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. 18, pp. IX-XVII.
- 10) Voir STENDHAL, *Correspondance générale*. Édition Victor DEL LITTO avec la collaboration d'Elaine WILLIAMSON, de Jacques HOUBERT et de Michel-E. SLATKINE, Paris : Honoré Champion, 6 vol., 1997-99, t. 3, p. 729.
- 11) Voir *ibid.*, t. 3, p. 727. この手紙のなかでスタンダールは、「ルヴュ・ド・パリ」誌に掲載されたシメオンの文章を自著に引用する許可を請うている。
- 12) 当時の印刷作業のペースを窺わせるスタンダールの証言が、1830年11月付ルヴァヴァスール宛の書簡にある——「『アルマンズ』のように、週あたり2シートまで刷られるだろうと思っていました」（*ibid.*, t. 3, p. 784）。『ローマ散歩』の場合、総頁数と印刷期間から単純計算すると週に4シートぐらいのペースで組版の作業は進んだと考えられるが、そうすると6月には第2巻の組版は始まっていたと推測できる。じっさい同書初版の第2巻のうち、1828年12月4日の手記には次の傍注が印刷されている——「1829年復活祭の日、恋愛により校正できず。6月21日、戦いと幸福により校正できず […]」

(STENDHAL, *Promenades dans Rome*, Paris : Delaunay, 2 vol., 1829, t. 2, p. 460)。つまりこの覚書は、1829年の6月21日の時点でスタンダールによる校正が第2巻の29番目の折丁まで進んでいたことを示しているのである。

- 13) Voir Nicole FELKAY, « Stendhal et l'imprimeur Henri Fournier », *Stendhal Club*, 15 janvier 1981, n° 90, p. 132.
- 14) Voir STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. 3, p. 622 et t. 5, p. 651.
- 15) Voir FELKAY, *art. cité*, pp. 133-135.
- 16) Voir Henri MARTINEAU, *Petit dictionnaire stendhalien*, Paris : Le Divan, 1945, pp. 220-222 ; voir également Franco CASAMASSIMA, « Le récit de la révolution de Naples dans *Rome, Naples et Florence*. Stendhal considéré comme source historique (II) », *Stendhal Club*, n° 61, 15 octobre 1973, pp. 61-65.
- 17) *Le Couvent de Baïano*, op. cit., p. VIII.
- 18) Voir MARTINEAU, *op. cit.*, pp. 331-335.
- 19) 第7章でスタンダールは、知り合ってから4、5年のあいだミシュルーと毎日会っていたと述懐している。Voir STENDHAL, *Souvenirs d'égotisme*. Texte établi, annoté et préfacé par V. DEL LITTO, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. 36, p. 99.
- 20) Voir STENDHAL, *Vie de Rossini*. Texte établi et annoté avec une préface et un avant-propos par Henry PRUNIÈRES, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. 23, p. 79.
- 21) Voir CASAMASSIMA, *art. cité*, pp. 65-68.
- 22) Voir François MICHEL, *Fichier Stendhalien*. Présenté par Jean FABRE, Victor DEL LITTO et James F. MARSHALL, Boston : G. K. Hall & co, 3 vol., 1964, t. 2, pp. 647-648.
- 23) Voir DEL LITTO, « Préface » pour *Chroniques italiennes*, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. 18, pp. XLIX-LI.
- 24) *Ibid.*, p. 346. 備忘の日付は1842年3月15日。作家の死の8日前である。

Neuf lettres inédites de Henri Fournier à Paul Lacroix

— I (6) —¹

Paris, [juillet 1829]

Voulez-vous bien, Monsieur, remettre au porteur la chronique italienne. La personne qui me l'a cédée m'a offert et j'ai accepté de faire venir un ex[emplaire] de la brochure qui a été imprimée sur ce sujet. Cela joint à des renseignements que j'ai me fait regarder comme véritable cette chronique, mais vous qui êtes habitué aux petites fraudes littéraires, serez moins crédule que moi. — M. Caraffa [*sic*] et d'autres italiens établis ici sont des témoignages à invoquer.

Toujours est-il que je fais imprimer et date de la feuille 6, ce qui me force à compter sur vous d'une manière bien positive dans 15 à 18 jours pour les 5 feuilles. L'essai historique rentrera dans ce que j'intitule récit, les notes contiendront d'autres matériaux et j'arriverai, j'espère, à 18 feuilles.

Un bibliophile m'a déjà parlé de faire tirer sur le papier particulier à cette société un exempl[aire] pour chacun des membres, je vais écrire au secrétaire, je souhaite encore qu'il ait plus de confiance que vous.

Toujours est-il que je vous prie d'en parler en ce sens, et sous quelques jours et lorsque j'aurai quelques feuilles, j'irai vous voir et nous parlerons de la manière de faire prôner cette publication d'avance.

Agréez l'assurance de ma considération.

H. Fournier Jeune

Paris, [juillet 1829]

Je n'ai pas eu l'honneur de vous voir, ayant toujours quelque appréhension de prendre sur vos moments de travail quand je vais vous voir.

Avez-vous lu, écrit, où en sommes-nous, voilà ce que je désire savoir par un mot de vous.

Voilà maintenant où j'en suis. Les feuilles 1, 2, 3 et 4 sont faites mais non tirées, elles contiennent le récit allongé des documents pris dans les paperasses que je vous ai montrées, plus le commencement de la chronique encore allongée de notes presque indispensables. Je finirai bientôt la composition et vous attendrai alors avec vos 5 feuilles puisque la 1^{ère} porte feuille 6.

Je passe condamnation sur votre jugement sévère, qu'il soit entre nous comme vous dites mais je ne vous en prie pas moins et je vais vous envoyer des feuilles à mesure. J'ai d'ailleurs 3 articles pour le *Voleur*, le *Figaro* et un autre journal.

Je trouve aussi que ne rattacher en rien votre essai sur les couvents avec mon épisode, ce serait criant et jurerait. Il faut au contraire qu'à la fin vous ameniez par une transition quelques phrases que vous retrancherez si vous réimprimez quelque part cet essai. Enfin qu'il soit tonnant contre le fanatisme d'alors et les prêtres, mais pas d'histoire qui fasse jeter le livre de dégoût, et pas d'obscurités, car vos 2 volumes antiques en sont pleins².

Je vous transmets l'avant-propos et le titre, et les reprendrai quand j'irai vous voir, vous le corrigerez et allongerez si vous le jugez à propos, et d'ailleurs il faut y ajouter quelque chose qui explique comment M. Jacob y a mis la main, je vous donne ma parole que je crois encore à l'authenticité de ce manuscrit dont je vous

abandonne le style.

Tout à vous,

H. Fournier Jeune

On me propose pour épigraphe celle-là prise, dit-on, de *La religieuse*³.

« Ces femmes sont belles comme les anges de Klopstock, terribles comme les démons de Milton. »

— III (1) —

Paris, le 23 juillet 1829

Si vous n'aviez rien à me remettre, veuillez ne pas vous déranger, je tiens maintenant à avoir le plutôt possible votre essai. Voilà ce que j'ai à vous répondre sur 2 points.

Le traducteur est un homme qui tient à une famille distinguée de Naples, chose que je sais à n'en pas douter, pour rien au monde il ne peut mettre son nom, mais tout autre Italien. Je ne crois pas en vérité qu'on vous mette rien sur le corps autre que ce que j'annonce dans le titre.

Les fragments bribes et autres, entrent sauf les choses ineptes ou inutiles, comme il y en avait, dans les notes des pages, notes de la fin et récit.

Il faudrait que j'eusse ces 5 feuilles ou au moins 3 cette semaine.

Tout à vous,

H. F.

J. Fournier Jeune, Libraire,

Rue de Seine, N° 14.



Paris, le 23 juillet 1829.

Si vous n'avez rien à me remettre
voulant ne pas vous déranger, je
tiens maintenant à avoir le plus
possible votre opinion, voilà ce que
j'ai de vous répondu par 2 points.

Le traducteur est un homme qui
tient à une famille distinguée de
Naples, chose que je sais et non
pas doute, pour rien au monde
il ne peut mettre son nom, mais
tout entre l'honneur. J'en ai pu
en voir qui vous mette rien
sur le corps entre que ce que
j'en ai dans la tête.

Les fragments d'écrits et
autres, entrent sans les choses
écrites ou imprimées, comme il y en
avait. Dans les notes des pages,
notes de la fin et tout.

Il faudrait que j'eusse les 3 feuilles ou
au moins 2 de la première — tout à vous J.F.

Lettre du 23 juillet 1829

© Bibliothèque nationale de France

— IV (3) —

Paris, [juillet 1829]

Je vous envoie l'avant-propos pour que vous le corrigiez et revoyiez si cela ne vous ennuie pas trop, et ajoutiez quelques lignes qui vous regardent.

Quant au titre nous mettrons des initiales qui fassent présumer un des membres nombreux des familles Carafa ou autres, ne vous inquiétez pas de cela.

Vous aurez demain l'épreuve de vos recherches, la 2^{ème} suivra de près, et tandis qu'on finira le tirage de la chronique, on composera vos dernières feuilles ; mais de grâce ne faites pas trop de corrections sur les épreuves, car c'est une mort pour les pauvres libraires dont les mémoires s'enflent alors d'une cruelle manière chez l'imprimeur.

Je n'ai pas pu lire votre écriture, elle me perd les yeux, le compositeur en dit autant.

Envoyez-moi la suite, je crois que dans vos deux envois il y a pour 2 feuilles 2 pages autant qu'on puisse juger approximativement.

Agréez mes salutations.

H. F.

— V (8) —

Paris, [juillet 1829]

Je vous envoie la valeur à peu près de la 1^{ère} feuille ; je vous en prie le moins possible de corrections, dispensez du reste à votre guise les alinéas, nous vous enverrons une 2^{ème} épreuve mise en page.

J'attends de la copie, la suite de l'impression devrait vous être envoyée demain matin.

Joignez de plus l'avant-propos.

Agréez mes salutations.

H. F.

Si vous voulez pour le 5 faire insérer dans le *Voleur*, donnez, s'il vous plaît, depuis la page 81—récit, jusqu'à la 94—3^{ème} ligne, et pour continuer —depuis la page 121, au 3^{ème} alinéa « un siècle après », jusqu'à la fin.

C'est le *récit*, moins une digression faite pour remplumer notre volume.

— VI (5) —

Paris, [août 1829]

Je ne vais pas vous voir, parce que mieux vaut vous laisser travailler.

Quand vous aurez lu et relu la feuille une, deux et trois, envoyez-moi “demain” la 1^{ère} et la seconde et gardez la 3^{ème} pour voir si elle s'enchaîne avec les suivantes.

Si j'ai bien compris, vous avez eu la complaisance d'envoyer le *Récit* sauf la *digression historique* au *Voleur*.

Il faudrait arranger un article pour le *Figaro* — moitié de l'avant-propos moitié de la chronique, sans l'estimer ni l'analyser, plus tard un article sur le travail de M. Jacob.

Si vous avez eu un autre journal, arrangez pour le mieux.

Tout à vous,

H. F.

— VII (2) —

Paris, [août 1829]

Vous allez me croire un barbare, mais je n'ai pas lu vos *recherches*, parce qu'il me faut 4 feuilles imposées pour que je puisse lire avec quelque suite. Tachez donc, puisque la vigueur du *Couvent de Baïano* commence à poindre pour vous, d'amener dans votre feuille 5 une petite phrase qui rattache cet essai au reste.

M. Girardin nous a omis⁴, je serai bien fâché qu'il en fût de même pour le 10, comptant paraître le 19.

À coup sûr M. "Jal" ou Rolles [*sic*]⁵ sont en état de faire des articles, mais moins que vous qui connaissez le livre, et puis feront-ils avant que le volume paraisse, chose à laquelle j'attache une certaine importance puisque j'ai compté que le *Voleur*, la *Pandore*, le *Figaro* et le *Globe* en parleraient *a principio*⁶. Faites donc deux colonnes sur M. Jacob, et quelques phrases qui annoncent l'énergique et le terrible contenus dans cette feuille 13, sans donner l'analyse du livre.

Je vous enverrai les 5 épreuves de vos feuilles, et cela joint aux 13 ou 14 feuilles fera matière à examen pour les personnes auquel[le]s vous voulez confier l'ouvrage.

Vous aurez tantôt un placard, le porteur de la présente prendra la feuille 2 et 3, si vous les avez et la copie.

Tout à vous,

H. Fournier Je[une].

J. Fournier Jeune, Libraire,

Pont de Seine, N° 14.

Paris, le

182

Vous allez me croire un Barbare,
Mais je n'ai pas les vos recherches, pour
quel me fuit. 4 feuilles impures pour
que je puisse lire avec quelques suites.
Tâchez donc jusqu'à la rigueur du
Convent de Baiuno l'ouvrage à pointer
pour vous, & amener dans votre feuille
une petite fin. — Qui attache
cet essai au reste.

M. Goussier vous a omis, je
serai bien fâché qu'il en fut de même
pour le 10, comptant surache le
19.

à coup sûr, on fait, ou plutôt son
en état de faire des articles, mais moi,
que vous qui connaissez le bon,
et puis fermez le livre, que le
volume paraisse, Chrs. a quelques
jettées une certaine importance
parque qui compte que le volume
la candore le fera ~~en~~ et grâce

en parlant a Principis. faites donc
 Saint Calmes sur in Jacob, et
 quelques phrases qui annoncent
 le courage et le terrible contenten
 de cette feuille 12, sans donner l'analyse
 du livre. Je vous enverrai deux épreuves
 de vos feuilles, et cela pour
 aux 12 ou 14 feuilles fera malice
 à examiner pour les personnes avec
 qui vous voulez confier l'impression.
 Vous avez tantôt un standard,
 le premier de la présente prendra
 la feuille 2 et 3. Je vous les envoie
 et la copie.

Tout a vous

H. le fils de J.

113 9668 (2)

— VIII (4) —

Paris, [août 1829]

J'ai vu hier M. Lassailly⁷ et l'ai adressé à mon personnage.

J'ai promesse au *Globe* pour samedi, je vais envoyer vos 5 feuilles à M. Girardin, tachez de livrer ou de lui écrire et qu'il nous insère.

Je vais au *Figaro* tantôt, si votre article est prêt, je le porterai, sinon je préviendrai M. Roqueplan⁸. Un article sur les moines est à l'ordre du jour pour ce journal.

Je vous remettrai jeudi des exempl[aires] pour des journaux, et paraîtra samedi ou lundi.

Si vous n'aviez qu'à relire cet article, mon domestique attendra.

Tout à vous,

H. F.

Faites-moi savoir comment je dois acquitter ce dont je vous suis redevable, c'est une corde à toucher maintenant et je suis à votre disposition.

— IX (9) —

Paris, 22 février 1830

Votre lettre m'est arrivée, Monsieur, la veille du jour où j'avais décidé de vous aller voir, ne le faisant pas autant que je voudrais, par mille et une raisons qui me font ou rester chez moi à lire des épreuves ou courir aux journaux.

Encore le *Couvent de Baïano* qui vous tracasse. En publiant un roman il y a

4 jours, j'ai prié le compositeur de la couverture, de prendre au hasard une page de mon catalogue, et cette annonce s'est rencontrée, *Inde Iræ*, si je puis appeler ainsi votre reproche.

J'attache si peu d'importance à ce volume, et tant à ne point vous ennuyer, que je vous engage à désavouer cette paternité dans vos *Deux fous*⁹, et dans le *Journal de la librairie*¹⁰ ; ne fondez pas cependant d'une manière trop violente sur la pauvre chronique, et dites qu'elle fut confiée à l'édition par un gentilhomme napolitain qui passait quelques semaines à Paris, si cela vous convient.

Ce livre se vend encore quelquefois, aussi est-il inutile de parler de sa médiocrité ; il vaut mieux parler de son authenticité à laquelle on croit généralement.

Je voulais vous voir, et vous parler de M. Las[s]ailly qui involontairement manque à sa promesse et ne sert à rien. Il pleure quand on lui fait des reproches, et sa santé est telle qu'il faut l'amener à finir, sinon par des reproches du moins par des observations ménagées. Si vous le voyez, veuillez le pousser et rendre ce service à la personne à laquelle vous avez bien voulu l'adresser.

Je vous réclamerais bien encore un petit service d'un autre genre. Je veux aller à *Hernani* et pas moyen d'avoir une place. Je désirerais maintenant un parterre de luxe ou de faveur au risque de me placer ailleurs.

Si vous voyez M. Hugo, demandez-lui pour moi, comme libraire qui peut au besoin devenir son éditeur, s'il ne s'arrange pas avec mon confrère et ami Gosselin. Il m'accordera peut-être cette faveur.

J'irai vous voir cette semaine, j'espère.

Tout à vous,

H. F.

1. 以下、書簡の配列はわれわれの推定する執筆順による。司書による整理番号はアラビア数字で()内に示す。
2. 1825年にラクロアがジュエヌ書店から上梓した歴史小説『ある国王の暗殺 *L'Assassinat d'un roi*』を指す。
3. デイドロ『修道女』(1796年刊)。しかしながら実際の出典は、デイドロが1772年に出版した『女性論 *Sur les Femmes*』である。
4. 後の新聞王エミール・ド・ジラルダン (Émile de Girardin, 1806-1881)。彼は1828年に「ヴォールール」紙を創刊した。
5. オーギュスタン・ジャル (Augustin Jal, 1795-1873)。ジャルは海軍出身のジャーナリスト・文筆家。ジャック＝イポリット・ロル (Jacques-Hippolyte Rolle, 1804-1883) も同じくジャーナリスト、当時はおもに「パンドール」紙や「フィガロ」紙に寄稿していた。
6. 後者2紙に関しては「グローブ紙」が1829年8月19日に、「フィガロ」紙が同22日に『バイアーノの修道院』を紹介するコラムを載せている。
7. シャルル・ラサーイ (Charles Lassailly, 1806-1843)。「青年フランス派」の作家。代表作は『トリアルフの悪どいやり口 *Les Roueries de Trialph*』(1833)。
8. ネストール・ロックプラン (Nestor Roqueplan, 1805-1870)。モントリオール生まれのジャーナリスト。1829年当時は「フィガロ」紙の主筆を務めていた。
9. 1830年4月にランデュエル書店から上梓されたラクロアの小説『二人の狂人——フランソワ1世の時代の物語』。
10. 1811年に創刊された「フランス帝国書誌」紙の異称。